

快に過ぎさう……。儲てそこで一喫吹はせ給へ。』

アヅデイ、イヴァノリツチは天井を見て安樂椅子の上うへに身動もせず横よこになつて居る。キスターは煙管きせるへ火ひを點つけて窓まどへ行つて、指ゆびを以もつて硝子板がらすいたを打うち始めた。

『那樣に僕ぼくのことを彼等あれが話はなして居たか?』斯かう突然アヅデイアヅが聞いた。

『話はなして居たよ!』

とキスターは意味いみありげに返事へんじをした。

『何なんの話はなしを爲した?』

『ム、云いふたよ、如何どうぞして君きみと知合しりあひになりたいとさ!』

『誰たれが?』

『何どうも好奇ものまきな!』

アヅデイは從僕じゆうはくを呼よんで馬うまに鞍くらを置おくやうに命めいじた。

『何所どこへ行ゆくのだ?』

『乘馬學校じようばがくかうへ!』

『それでは、さやうなら、ペレカトフの所ところへ行ゆくか。エ、?』

『仰おほせの通り、君きみが望のぞむから。』

とラチコフは懶のろげに伸のびをして答こたへた。

『妙めうなことを云いふ親爺おやぢだ!』

キスターは叫さけんで街道かいだうへ出掛でかけ、考かんがへに沈しづんで、深ふかい溜ため

息を吐いた。

四

キスターとラチコフが着いた通知のあつた時にはマシヤは丁度客間の扉の傍へ行つた時であつた。彼は直ぐ自分の部屋へ戻つて鏡の前へ行た……胸は烈しく動悸が打つて居た。小女が客間へ来る様にと呼びに来た。マシヤは水を少し飲み、二度階段に立止つて、遂々下へ行つた。

ペレカトフは不在であつた。マカリューナは長椅子に掛つて居て、ラチコフは制服を着けて膝の上へ帽子を上げて、安樂椅子に坐つて、其側にキスターが居た。彼等はマシヤ

が入つて来たので立ち上つた、キスターは例の親しい笑みを以て、ラチコフは眞面目で窮屈な風で、マシヤは迷亂いて腰を屈めて、母の傍へ行つた。初め十分程は好い鹽梅に過ぎた。此内にマシヤは氣を取り直して漸くラチコフに目を付け始めた。ラチコフは夫人の間に極めて簡単に併も難澁に答へた。彼も凡ての利己主義の人の如くに内氣であるのである。マカリューナは客に庭の散歩を申出でた、併し自分では椽側迄しか行かなかつた。彼は娘に眼を放さないで其邊の母親達の様に手に粗い網袋を提げて其後に踵き回るを必要と思はなかつた。散歩は寧ろ長い方であつた。マ

シヤはキスターの方と多く話をしたが何方の顔をも見得なかつた。アヴデーはマシヤに話しを仕掛けない。キスターの聲は激情を示して居る。彼は笑ひ且つ可なり饒舌つた：
 …。彼等は遂に小河へ出た。庭則ち岸から一尋程の所に廣い丸い葉で取圍まれて水の滑らかな表面に浮んで居る様に見える一株の蓮があつた。

『何といふ美麗な花！』

マシヤが斯う云ふた時に丁度ラチコフは劍を抜いて、柳の軟い枝を片手で握つて、水の上へ全身を差し掛けて花を切り落した。

『深いからお氣をお付けなさい！』

マシヤは恐れて叫んだ。ラチコフは劍の先でマシヤの直ぐ足下へ岸まで持て来た。マシヤは屈んで花を取上げて優しい喜ばしい駭を以てアヴデーを見詰めた。

『妙！』

とキスターが叫んだ。

『だが僕は實は泳げないのです！……。』

突飛ラチコフが云つた。マシヤは此言葉が氣に喰はない。何故あんなことを云ふのだらう、と駭いた。

ラチコフとキスターは夕刻迄ペレカトフの處に居た。

新しい何か分らないものがマシヤの心に往來した夢の如き迷亂の様が一度ならず其顔に表はれた。彼は一層靜に舉動ふた。併し母の眼と出合ふても顔を赧めないで却て母が何とか聞く様にと云つた風に二人を探す様に見えた。其晩中ラチコフは不作法の注目をマシヤに拂つた。併し此作法な注目すらマシヤの罪のない倨傲心を満足せしめた。彼等が兩三日中に復尋ねる約束で歸つた後に、マシヤは靜に己が室に入つて昏迷の有様で傍を見廻した。マカリーヴナが遣つて来て、例の通り娘を接吻した。マシヤは唇を開いて何か云はうとしたが一言も出さない。彼は白狀しやう

と思つた―何をだか分らない。其心は靜に夢境を辿つて居る其側にはラチコフの取つた花が見事な硝子の鉢に水の上に置いてある。既に寢床に就いたマシヤが氣を配つて起き上り、肘に椅子掛り、其汚れない唇が軟かに生々した白い花瓣に觸れた……翌朝キスターは其友人に問ふた。

『偕て、君はあのペレカトフを好くか、いえ、僕の謂つた通りか、何うだ？』

ラチコフは返事をしない。

『オイ話せよ、話せよ！』

『全く僕は知らないよ。』

『馬鹿な、サア。』

『その……名は何と云つたか……左様々々マセンカ！ 醜くはない。』

キスターは、

『それで君は……。』

と云つた限り其後はもう云はない。

五日過ぎてラチコフの方からペレカトフを尋ねやうと云ひ出した。

ラチコフは獨りでは行かない。フキデイの居ない時に話をして見度いがそれが出来ないで可成避けて居た。

二人の友達が二度目に來た時にはマシヤは前より氣が樂で有つた。彼は今となつては却て聞かれもしないに白狀して母を煩はさなんだのを竊かに喜んで居る。

晝餐の前に、アヅデイはまだ去勢しない若い馬に乗らうと云ひ出して、其狂暴なる棒立にも構はず立派に乗り扱した。夕方には彼は打解けて、戯語と高笑をするに至つた。

それで間もなく又元へ反つたが尙ほ一時快くない感じをマシヤに起させること丈は成功した。マシヤは未だラチコフが自分に起させた情感は如何なるものであるかは能くは分らないが、ラチコフの好まない處は皆不幸と寂寥との致す

處と考へた。

五

兩人は度々ペレカフトの家を訪ふ様になつた。キスターの位地は益々痛ましくなつた。彼は己の行爲を悔まなかつた。併し少くとも試験の時日を切り縮めんと願つた。マシヤに對する信服は日々増して行つた。マシヤも亦彼に付て温かに感じた。然るに仲人で、會心者で、一の友人なるに過ぎずとは實に慘憺たる、有難からざる仕事である！冷靜なる理想的の人はよく苦悶の神聖、苦悶の幸福なることを云ふ……が併しキスターの温かなる單純なる心には苦悶は

決して幸福の源泉ではなかつた。遂に一日ラチコフが已に身仕度をしてキスターを誘ひに来て、馬車は已に昇り口に待て居るのに、驚いた事にはキスターは文もなく家に残ると云ひ出した。ラチコフは懇願した。困つた、怒つた……。キスターは頭痛がすると辯疏した。ラチコフは獨りで出掛けた。

此亂暴人は近頃大分變化した。同僚を平穩にして捨て置き、新參者を弄めず、其上にまだキスターが云つた様に心は咲き出さないが、それでも確に多少穩かにはなつた。彼は是迄謬影されたとは云ふことは出来ない。

彼は何も見た處もなく經驗した處もない。だからマシヤが彼の心を搔き擾したとて左程駭くべきことではない。だが決して心臓に觸れたのではなく只脾臓が満足したのみであつた。彼に對するマシヤの感情は奇妙なものであつた。殆んど眞直に彼を見たことがない、話し掛けることも出来ない。彼等が二人限りで置かれることがあるとマシヤは怖しく自分を拙く感じた。マシヤは彼を例外の人間と爲た。其前に居ると壓付られる様な搔き擾される様な氣がする。そして譯の分らない信用を得る價值のない人と思ふた。併しマシヤは常に彼の事を絶えず痛ましく且つ悲凄に考へて

居た。之に反してキスターとの交際は、過度に欽ばせ感激させるでもないが、慰められ、機嫌を好くされた。キスターとなら其腕に倚り掛つて（尤も兄弟であるかの風に）情を含めて其顔を睥視め、彼が笑へば一緒に笑つたりして二三時間は饒舌をして居られる——併し滅多には彼のことを考へない。ラチコフには何か謎の様な此若い娘に解せない處であつた。娘はラチコフの心は森の様に暗黒であつて其不可思議な幽處に衝込んで行くものを凡て抑止する様に感じた。兒童共が、遂に其の底に静な黒い水を見付ける迄、久しい間、深い井戸を覗き込んで居る様に。

唯つた一人でラチコフが客間へ入つて来た時にはマシヤは初めは恐怖した……併し其内に楽しく感じて来た。マシヤは一度ならずラチコフと自分との間に何か誤解があつてラチコフは是れまで己れを表示する機會が無かつた事と想像した。ラチコフはキスターの來ない譯を話した。親達は遺憾を述べた。マシヤは懷疑的にアヴデーを眺めて望なさうに感じた。

晝餐の後二人限りになつた。マシヤは云ふ可き處を知らないでピアノに向つた。指は忙がしげに慄ひて壓板の上を飛んで居る。マシヤは度々手を停めては歌ひ出すのを待つ

居る……ラチコフは音樂を解しないし又注意もして居ないのであるのだ。マシヤはロツシニキと（丁度其時にロツシニキが流行り出して居た）マザルトの話しを爲始めた……。ラチコフは『全くその通りで』、『決して『美麗』實に』と曰ふに過ぎない。マシヤは魯西亞風の華やかな調子を弾いた。

ラチコフは聽いて居た……夫れから遂にマシヤがラチコフに向き返つたときには、爲めにマシヤは直ぐ飛び上つてピアノを閉ぢた程に其顔には飾りのない倦怠が表はれて居た。マシヤは窓へ行て大分長く庭を眺めて居た。ラチコフ

は己の席より起たないで矢張黙て居た。マシヤの心中には
痲癩が臆病の居所に代り始めた。

マシヤは怪んだ。

『如何なすつたのです？』

『お厭なもので？……それとも御存知ないので？』

ラチコフが臆病の番になつた。彼は痛ましい壓迫する疑
惑を感じた。此時は既に暴れ始めて居た！……『斯んな厄
介な娘に構て居なくてはならぬとは全く悪魔の意思である
のだ』と呟いた……。而して此瞬時にマシヤの心に觸るゝ
は如何に易々たることぞ！。假令偏人であつても此様な非

凡の人（マシヤは斯う思つて居た）に云はれたなら何でも
了解し、何でも勘辨し、何でも信じないでは居られないの
であるのに、見兼ねた馬鹿げた遠慮ではある！マシヤの眼
には困つて涙が立つて居る。『妾に打明けやうともせず、又
妾が全く其倚信を得る値價がないのなら、何故妾に會ひに
來るのだらう？ 又或は打明けるやうに妾の仕向け方が悪
いのか？……』と考へた。急はしく見廻して、問ひた氣に
又探究する風でラチコフを瞥視した。ラチコフも此を見損
じない。最早黙つて居る譯に行かなくなつたので躊躇なが
ら云ひ出した。

「マルヤ、セルギトヴナ様私は……私は……御話しなければならんことがあります。」

マシヤは直ぐ返した。

「御話しなさい！」

ラチコフは決心の付かぬ體で傍を見廻した。

「今は如何も……。」

「何故今では……。」

「今御話するのは厭です……二人限りのときに……。」

「だって、今は二人限りではありませんか？」

「さうです……併し……家の内では……。」

マシヤは分別を失つた……「若しそれを厭へば最早それ限りだ」と考へた。嗚呼好奇心はエヴを亡せり……。

「仰せに従ひます。」

と遂にマシヤが答へた。

「それでは何日？、何所？」

マシヤの呼吸は忙しく、不規則になつた。

「明日……夕刻に。貴郎は長い牧場の上にある叢を御存

知ですか？」

「水車の後のですか？」

マシヤは點頭いた。

『何時に？』

『御待ちなさい……。』

最早マシヤは云ひ得なかつた。聲は途斷れた。眞蒼になつて急いで室の外へ出た。

十五分の後ペレカトフは特有の鄭重を以てラチコフを客間へ案内して、情深く其手を握り、見捨てない様にと願つた。

客を残して出て給仕に適宜に剃て呈げる様にと命じて、返事も待たず、疲勞れた様子をして自分の室へ戻り、同じ風で長椅子に倒れて、正直に直ぐ睡入て了つた。

『お前は今日は少しく顔色が蒼く見えるが如何もないのかえ？』

マカリীগナは其夕方娘に聞いた。

『ハイ。』

マカリীগナは娘の頸に直に手巾を當てた。さうして親たる威嚴を少しも損せずして母らしき心配を以て、問ひ詰めた。

『お前は大層蒼いよ、此方をお向き、お前の眼は重たげよ、何ともないことはないよ。』

マシヤは逃路を見付けやうとして云つた。

『少し頭痛がします。』

『私は知て居るよ！』

と云つてマシヤの額へ何か香料を置いて、

『併し熱はない。』

娘は俯して床から糸を拾つた。

マカリューヴナは娘の纖弱な腰を抱き緊めた。

『何か私に話し度いことがあるのではないかい。』

斯う可愛さうに腰を緩めないで聞いた。

『阿母さん妾が？いゝえ。』

マシヤの其の時の狼狽た態度は母の注目を免かれ無かつ

た。

『オ、否や、お前は……マア少しお考へ！』

併しマシヤは却々平氣に復らない、で返事を爲る代りに
笑ひながら母の手に接吻した。

『それでお前は何も話すことは無いのかい？』

『いゝえ、全く、何んにも。』

マカリューヴナは暫く黙て居つて復た娘に云つた。

『私はお前を信じて居ます、お前が私に隠し立を爲ないの
も知て居ます、全くだよ。さうだらう？』

『勿論です。』

併しマシヤは少し顔を赧めざるを得なかつた。

「夫れが善い、何んでも私に隠すのは善くない……私はお前を何の位可愛がるか分つて居るだらう。」

「ハイ。」

マシヤは母を抱き緊めた。

「モウ、モウ、分つた（マカリィヴナは室の内を彼方此方歩行いて居る）私にお話し！」

問題は何も重要なことでは無いと思つた人の様な調子で聞いた。

「今日お前はアヴデーさんと何様なことのお話を爲た

え？」

娘は明瞭に答へた。

「アヴデー様とですか？　色々の事を……。」

「お前は彼の方が好きかえ？」

「ハイ、好きで御座います。」

「お前は何の位彼の方と知合になるのに苦勞したか、又何れほど心が刺戟されたか知つて居るかい？」

マシヤは彼方を向いて笑つた。

「何んと不思議な人だらう！」

とマカリィヴナは機嫌よく語つた。

マシヤはラチコフを辯護爲度い様な氣がした。併し之れを控へた。

「左様勿論彼の方は奇體な魚です、併しそれでも善い人です。」

「さうだ！……何故フキオドルさんは來ないのだらう？」

「加減がお悪いのでせう、ア、左様云へば彼の方が狗の子を下さると有仰いますか頂いても宜しう御座いますか？」

「ハイ。」

「宜いとも。」

「ア、有難う、有難う。」

マカリグナは戸の所迄行て又急に此方に向いた。

「お前は約束を覚えて居るかえ？」

「何んなお約束？」

「お前は戀路に入つたなら私に話す筈だつた。」

「覚えて居ますよ。」

「サテ、それが未だかえ？（マシヤは好い調子で笑つて居る）私の眼を御覽。」

マシヤは明かに且つ大膽に母を見た。

「迎も其様なことは無い……私を欺すなど云ふことは！」

……如何して左様な事が考へられやう！あれは未だ眞實に子供だよ！』

マカリージュナは斯う考へて確めたと思つた。

マシヤは又『併し全く悪い事を爲た』と思つた。

六

キスターはラチコフが室へ入て来た時には已に床に就た後であつた。躁暴なる人の顔には決して一個の定つた情が現はれて居ないものである。今彼も亦此の通りで虚偽の冷静、疎野なる喜悅、優勝の自信等の錯雜なる感情が顔に現はれて居た。

『どうだつた、く？』

キスターが急はしく聞いた。

『僕が行つたよ、君に宜しくと云つた。』

『左様か？ 變りはないか？』

『勿論さ、何んだつて。』

『何故僕が来ないと聞いたか？』

『ム、左様云つた様に思ふ。』

キスターは下を向いて考へ込んだ。

ラチコフは天井を眺めて調子外れに唸つた。

『併し……此方に向け……君は賢い男だ、君は學問もある

併し遠慮なく云へば君は大分時としては全く君の理想の外に立つて居る。』

『君の云ふのは何のことだ？』

『何んのこと、は！ 此方を見ろ、婦人を例に取つて云へば、君は何時でも婦人を揚げて居る。婦人を謳歌して飽か無い。君の云ふ處を聞いて居れば婦人は全く天使だ、而かも天使の中の偉いものだ！』

『僕は婦人を好く又尊敬もする、しかし……。』

アヴデイは遮つた。

『勿論、々々、僕は君と議論して居るのではない議論杯は

僕の及ばぬ處だ。僕は平凡の人間だ。

『僕は……を云はうとした處だ……併し何故今日に限て……』

……今に限て……君は婦人のことを云ふのだ？』

『イヤ、何も云は無い、何も云は無い。』

大に意味あり氣にラチコフが笑つた。

キスターは何か心を讀む様に其友を見詰めた。彼はマシヤの應待が悪かつたこと、思つた（何んと單純な心ではないか）、則ち恐らくは如何な婦人にでも出来る様に彼を戲弄つた事と思つた。

『君は感情を害された、可哀想に、話し給へ。』

ラチコフは含笑した。

「僕は感情を害されたとは思はない。」

と云ひながら上髯を引張つて云つた。

尙ほ教師でいもある様に語を進めた。

「イヤ、先づ僕を見ろ、僕は只君が婦人に付ては門外漢だと云ふのだ。若者よ！君は僕を信する彼等は皆同じだ。」

彼等は只鳥渡骨を折れば善いのだ、それを焦燥すのだ、すると最早此方のものだそれマシヤを見給へ。」

「エ、。」

ラチコフは床を踵で叩いて首を掉つた。

「僕に何處か別段に人の心を惹くものがあるか、エ、！僕は其様所もないと思ふが、そんなものは無い、あるかい？それで僕は明日といふことで秘密の約束をした。」

キスターは起き上つて、其肘に倚り掛り、駭いてキスターを凝視めた。

アツデイは靜かに話を續けた。

「明日森の中で……最早聞くな、大抵想像し給へ。これはほんの序幕だ。君には解るまいが僕は實に待遠しい。可愛い小娘だ……ナアさうでないか？勿論結婚を爲やうとは思はない……併し僕の青年時代に返るのを嬉しく思ふ。僕は襯

衣の裾に纏付かうとは思はないが併し荷物丈は整理しやう。僕達は二人で鶯を聞ける。勿論僕の柄にはないのだ。併し淫奔者は君の知る通り眼が無い。君の傍に居ては僕は価値なく見えたのに相違ない。』

ラチコフは大分長く饒舌つたがキスターは聽いて居ない、彼は蒼くなつて顔を撫でた。ラチコフは低い椅子の上で身體を上下へ動かし上眼を使って、仰をしてキスターの感情を嫉妬に至らしめて、殆ど息の塞まる程喜んだ。去れどもキスターを苦めたのは嫉妬ゆゑではない。彼は事實其ものゝ爲ではなく、アヴデイの亂暴な不謹慎とマシヤに對

する冷淡な卑むべき關係の爲めに心を傷つた。キスターは熟と亂暴人の面を睥視めて、恰も始めて存分にラチコフの面を見た様に見えた。而して是れがキスターの始から計畫せる處であつたのか！此の如き爲めに自分の望を犠牲に供したのか！是れが愛の幸福なる影響であつた。

『アヴデイ、君はあの娘を氣に止めないと云ふのか？』
とキスターは遂に呟いた。

『いや馬鹿らしい！ いやアルカデヤ！』
と憎らしい含み笑ひでアヴデイが答へた。キスターの善心なる、それでも尙ほ承知しない。彼はアヴデイは今機

嫌が悪いで、元の習慣に欺まされつゝあつて、また新なる感情を現はす新字句を知らないのだと考へた。然し彼の心の内には憤怒の下に匿れて居る何か外の感情がありはすまいか？ラチコフの自白が單にマシヤに關はるが爲めに不愉快に感じさせなかつたか？如何にかしてラチコフが眞實マシヤと互に相愛したを、信せしむる者があるだらうか、否、否、千回云ふたとて、否。あの男が戀愛に？あの男は汗氣の多い黄い顔の神経質の猫の様な動作の、嬌吟を喜ぶ胸の嘔くなる人である。否なくキスターは此様な言葉で己が歸服して居る友人に我が愛の秘密を語りはしない：

却て溢るゝ幸福を表はさざる喜悅の爲めに眼に輝ける幸福なる涙を以て我胸を射るならん……。

『偕て親爺、さうとは思つて居無かつたと白状しろ、今は君は顛倒して居る。エヘ？ 妬ましいか？ 白状しろフェ

ダよ！ エヘ？ エヘ？』

キスターは言ひ出さうとした。併し壁に顔を向けた。彼は獨語した。『打明けて話してへ……彼にか？ 他のものではないぞ！ 彼は僕を了解しない……それだからだ。僕に悪感のみを想像する——それだからだ。』

アザデイは立ち上つた。

「君は睡さうに見える。邪魔を爲やうとは思はない。我兒よ楽しい夢を……楽しい夢を！」

假装の同情を以て斯う言つて、甚だ満足して立去つた。

キスターは朝まで寝られなかつた、熱に罹つた様な固執を以て幾度も寝返つて、寝返しく同じ事を考へた——是は不幸なる戀人にのみ極めて能く知られた仕事であるのだ。

「若しラチコフがマシヤを思て居ないにしても、マシヤの方から求めたにしても、何方にしても友達に、僕にでも、彼様に失敬な害心なことが言へるものでない。何の道彼の

娘は凌辱されるのだ。誰れが不幸な無經驗の少女に同情を寄せずに居られやう？」

併し彼娘は全く秘密の約束を結んだのか？ あれは……左様だ屹度結んだのだ。アヴデイは虚言家ではない、彼は決して虚言を云はない。併し恐らく意味のあるのではない單に戯言に過ぎまい……。

しかし彼の女は彼を知らない……彼は女を侮辱するとはあり得る。今日から最早何を云つても返事をすまい……併しラチコフを賞めて彼の女を激させたのは己れではないか？好奇心を起させたのは此己れではないか？……併し誰も此

様にならうとは思はない。誰れかそれを先見することが出来やうぞ？

「何を先見だ？ 久しい前に友達でなくなつたか？……併し畢竟嘗て友達であつたか？ 何んたる解題ぞ！ 何んたる學問ぞ！」と考に沈んだ。過去のことが總べて眼の前に回つて居た。遂に呟いた『然り僕は彼の男を好く、何故それが左様急に冷めやうとするのか？ 然らば厭になつたのか？ 否、何故嘗ては彼を好いたのか？ 僕唯だ一人か？』

キスターの愛らしい心は凡て他人が彼と交るのを避た。

其理由のある爲に懇親を結んだのだ。併しお心善しの青年は何れ程迄自分がお心善しであつたかを知らなかつた。

彼は考を進めた。『僕の義務はマシヤに警告するにある。

併し如何にして？ 人の事、則ち人の戀に干涉する権利があるか？ 其戀の性質を知つて居るか？ 或は又ラチコフ

の方にも……。』

『否、否、彼の男は石である……。』と涙で枕を浸し、激憤の爲めに高く云つた。

『全く僕の過失だ……僕は友——高價の友を失つた！ それで何方かと云ふとまたマシヤの方が惜しくない……僕は

何んたる病的利我者ぞ！　否、否、僕は中心より彼等の幸福を望む……幸福を！　併しラチコフは彼の娘のことを嗤つて居るぞ！……してまた何故それなら彼は上髯を染めるのか？　僕は全く彼が……すを信ずる。嗚呼僕は如何にも嗤笑すべき者である！』と繰返しながら睡入つて了つた。

七

翌朝キスターはマシヤに遇ふ爲に出掛けて行つた。彼等の出遇うた時にキスターはマシヤの様子が變つたのを認めた。マシヤも又キスターの變つたのを見付けた、併し双方共それを云はない。朝一杯平常と違つて双方共不愉快に感

じた。キスターは二様に意味のある。友誼的勸告の隠語と語句とを家で澤山準備して行つた。併し此前以て準備した處は何の用にも立無くなつた。マシヤは朦朧げながらキスターが自分を觀察して居るのを知つて居た。キスターの言つた或語は別段の意味のあること、想像した。併し自分も激情して居るのを知つて居るので我觀察を信憑しなかつた。若しキスターが夕刻まで居ないと云ふのなら、それこそマシヤの考へた通りなのだ。それでマシヤは彼に何も用はないと云ふことを彼に思はせようと試みた。キスターの方ではマシヤの不作法なのと不安の體とは明かに戀の表彰と取

つた。そしてマシヤの迎もラチコフのことを言ひ出し得ないを悟るに随て益々心配した。マシヤは頑固にラチコフの名を云ふのを抑へて居る。之が憐むべきフキオドル、フエポリツチには痛ましい経験であつたのである。彼は漸く我が感情を解し始めた。マシヤは決して此れほど美しく見えたとことはない。彼は何處から見ても全夜睡なかつた微紅が蒼い顔に飛び飛びに起つた。態度は弱々しくて揚らない時々其白い肩の上に慄きが見える。自分に覺えない疲れた笑みが唇を去らない。軟な光が急に其眼に閃いてまた直ぐに消えて了ふ。マカリーヴナが入つて來て一同に座に就

いた。そして恐らくは故意にアヴデイの話しを出した。併し母の居る前ではマシヤは佛蘭西人の所謂 *Jusqu'aux De*

hors (齒に關して) で身を固められて居る。

斯くして午前を過した。

『皆御一同にお晝飯を頂かうではありませんか？』マカリーヴナがキスターに聞いた。マシヤは側を向いた。

『イ、ヤ、御勘辨下さい、職務上の用事で……』斯う急はしく曰つて一寸マシヤの方を見た。マカリーヴナは程宜く遺憾を洩らし、ペレカトフも妻に倣つて何に角と述べ立てた。キスターはマシヤの傍を通つた時に『僕はお邪魔を致し

さうとは思ひません』と云はうと思つたが、併し御辭儀をして其代に『幸福なれ……去ばよ……御用心なさい……。』と囁いて去つた。

マシヤは眞底から吐息をついて、彼の去つたので驚慌に打たれた様に感じた。何がマシヤを浸蝕して居たか？ 戀か好奇心か？ 只神の知る所。併し著者は繰返して云ふ、唯好奇心のみが既にエヴを亡ぼすに充分であつた。

八

ロング、ミードオとはペレカトフの邸から殆んど一哩程距れて、スニーズピンカと云ふ小河の右手にある廣い平坦

な地區の名である。左岸は一面に密生した稚い樫の叢で蔽はれて、鴨の下り場と成つて居る。若干の狭小な巢喰ひ場所の外は全く楊樹の蔽被さつてある流の上に峻しく切つ立つて居る。ロング、ミードオの右手で其小河から半哩程の處から、樺の古木と胡桃の叢と野薇薔とで飾紐を着けた様な、傾斜した、紆曲つた、高地が起り始めて居る。恰も日が落ちんとして、遠方では水車の輾るのと啾啾くのが風に隨つて高く鳴り又低く鳴りして居る。其地主の馬の群は寛やかに牧場を彷徨ひ、一人の羊牧者は鼻唄を歌ひながら草を食る臆病な羊群の後に歩行いて居て、又一方に

は番犬が疲れた様に牝牛其の後を駆け回て居た。ラチコフは腕を拱いて小森の中を彼方此方へ歩行いて居た。其傍に繫いだ馬は牧場から聞ゆる牝馬や駒の高鳴に答へて度々嘶いた。アヴデイは平生の通り悪性で臆病であつた。尙ほマシヤの愛を確めないで彼を怒り我心を苦しめた……併し此激發が却て苦みを和げたのだ。彼は遂に胡桃の大きい叢の前に立ち止つて、乗馬鞭で枝の端の葉を苔ち始めた……軽い颯々とする音を聞き付けた……彼れは首を擡げて……十歩程の處にマシヤが急いで歩行いて居たので眞赧になつて帽子を冠り手袋なしで白い衣裳を着けて、遠てた風

頸へ手巾を捲いて立つた。マシヤは直ぐ眼を地へ落して、軟かに點頭いた……。

アヴデイは強ひて笑顔を作つて不作法に其傍へ行つた。

『私は如何許り幸福よ……。』

聞き取り難い程小さい聲で始めやうとした。

『妾は誠に嬉しう御座います……郎君に御會ひ申すのが……』

妾は平生夕方には此處へ散歩致します……そして貴郎は……』

マシヤは斯う呼吸も續けないさまで遮つた。併しラチコ

フにはマシヤが其の罪のない詐欺を維持する爲めに慎重を彼に宥し置く感じもなかつた。

『マルヤ、セルギーヴナさん私は貴嬢の方から申出たと思ひますが……。』

と威權を作つて宣言した。

『左様です、左様です……。貴郎は妾に會ひ度いと御望みなさいました、貴郎は……。を御求めました……。』

とマシヤは急しげに答へた。遂々聲が斷えた。

ラチコフは何んとも言はない。マシヤは怖々眼を擧げた。ラチコフはマシヤの方を見ないで、始めた。

『私は木訥な男です、そして自在にお話を……。御婦人に……。致すのに慣れません……。私は……。私は貴嬢にお話し仕度

いと望みました……。併し私は機嫌よく私の申すことを聞いては下さるまいと思ひます……。』

『お話しなさい。』

『貴嬢が……。と有仰るなら、それでは明かに申上げやう、

貴嬢と御懇親になる榮を得た以來今日迄久しい間……。』

ラチコフは語を切つた。マシヤは宣告の終結を待つて居た。

『併し何の爲めに此様なことを貴嬢にお話して居るのか解りません……。一體我々の運命に少しの變化もないのですから……。』

『如何して夫れが分ります？……。』
 『私には分ります、私は運命の打撃に向ひ慣れて居りますから。』

とラチコフは鬱幽に答へた。

今は全く運命に對して誹謗するのはラチコフに取て時を得たものでないとの感じがマシヤの頭に浮んだ。

マシヤは笑ひながら云つた。

『世間には御親切な方が御座います、或は御親切過ぎる方さへ……。』

『解りました、マルヤ、セルギーヅナさん、私を御信じた

さい、私は貴嬢の御親切を豫想致します……私……私は……

……貴嬢はお怒りなさいませんか？』

『いゝえ……何を有仰らうとなさるので？……。』

『私は申さうと思ひます……私は貴嬢を愛らしく考へますと……マシヤさん恐ろしく愛らしいと……。』

『誠に有難く存じます。』

と遮つた。マシヤの心は豫想と恐怖の爲めに痛んで居つた。それで語を進めた。

『ア、ラチコフさん御覽なさい何んと好い景色でせう！』
 マシヤは長い夕影で縞になつた落暉の爲めに赤く反照し

て居る牧場を指した。

ラチコフは内心話頭の急に變つたので喜ばされて景色を賞め始めた。彼の娘に極めて接近して立つて居た……。

マシヤは小さい頭を急に振り向けて、若い娘にのみ特に許された賜物なる親しい物答たげな柔和の眼付をしてラチコフを眺めた。

『貴郎は自然を御愛しになりますか？』
と不意に問ふた。

『左様、勿論……勿論……私は軍人として美想などいふことは柄に無いのを白状しますが併し夕方の散歩は愉快に』

感じます。』

アヴデイは斯う囁いた。

ラチコフは屢々我の軍人であることを繰返した。そこで暫く談話が途斷れた。マシヤは尙ほ牧場を眺めて居た。

ラチコフは『如何なる者だらう』と考へた。遂に可なり決心した聲で始めた。

『併し私の運命は如何決まるのです！ もつと掻い摘んで遣つて下さい！……。』

マシヤは彼に向つた。

ラチコフは戲謔で、もある様な調子で始めた。

『御許し下さい、併し貴嬢は私のことを如何御考ですか、畢竟は私のことゝ感じますのか……則ち……此身に優しくして下さるかどうか聞かせて下さい。』

マシヤは『妾を憐み、何んと不作法の人だらう』と獨語した。そして笑を帯びて答へた。

『ラチコフ様貴郎は御承知で御座いませう。打付けの御話に打ち付けに御答へ申すのは中々出来るもので御座いません。』

『それでも……。』

『しかし何のことを有仰るのです？』

『ハア、眞實私は今……を知り度いのです……。』

『しかし……貴郎は大層な決闘家で居らつしやるさうです
が眞實で御座いますか？ 眞實ですか？ 皆様が貴郎は一人
ならず人を御殺しなすつたと有仰ますが！』

とマシヤは臆病な好奇心から聞いた。

『そんなこともありました。』

アヅデイは答へて上髯を撫でた。マシヤは熟と彼を見て
『そんなら其手が……』と囁いた。

一方ではラチコフの血は沸え立つた。十五分以上も若い
可愛らしい娘が眼の前で動いて居たのである。

ラチコフは復た鋭い妙な聲で始めた。

『マシヤさん私の今の感情は貴嬢に御分りでせう……是迄は貴嬢は大層御親切でした……それなら萬望私が貴嬢に如何なものを見て宜いのか聞かせて下さい……』

マシヤは野花を燃つて居た……横眼にラチコフを見て、赧くなつて、笑つた。

『何を御戯言を有仰ます。』

と云つて花をラチコフに差し出した。

アツデイは其手を捕へて、

『斯くまで私を愛しますか。』

と叫んだ。

マシヤは怖さに全く冷くなつた。彼は元々アツデイに愛を宣言する意思は少しも無かつたのだ。其上自分が彼を氣に止めて居るかといふことすら確とは自分に解らないのに今茲でラチコフが買被つてマシヤに打明けよと強ゆるのはマシヤを誤解して居たのに相違ない……と斯ういふ念が電光より速かにマシヤの頭に起つた。マシヤは決して此様に急激な終局を豫想しなかつた。尤もマシヤは質問好きの子供の様に毎日『ラチコフが妾に眼を着けて居ると云ふことが有り得ることだらうか』と自分の心に問うては居た。併

し彼は楽しい散歩や尊く優しい會話を夢想したのだ。則ち如何に彼と散歩をしようかといふことや、彼の粗野なる人物が彼と一緒に在るときは一家團樂の樂の如く感ぜしむることや、又別れるときには手に接吻させることなどを想像したのだ。然るに其の代りに……。

其代りにラチコフの荒い口髯が既に我頬迄臨んで居るのを不意に氣付いた。ラチコフは囁いて居た。

『我々をして福ならしめよ、此世にこれ以外に幸福なるものは無い！』

マシヤは戰慄した。恐に打たれて一方へ投げ掛けられた。

そして眞蒼になつて樺の樹へ片手を掛け直ぐ立ち止つた。

アヴデイは恐しく混亂した。

『御免なさい私は本氣で……を望んだものではありません。』

マシヤは圓い眼をして無言で彼を眺めた……不愉快な微笑

笑がラチコフの唇邊を去らない……紅い斑點が彼れの面に

現れた……そして話を進めた。

『何を怖がります、何も大事件ではありません我々は互に心を知り合つて居ります……ですから……。』

マシヤは何も云はない。

『此方へ御出なさい、其話は止めにしませう……あれは皆

な戯謔じやうだんです……何なにんでもないのです、が併しかし……。』
ラチコフは其手そのてをマシヤに差し出だした。

マシヤはキスターが御用心ごようじんなさいと云いつたのを想おもひ出だした。そして恐おそれに打うたれて頰折しやれて寧むしろ鋭すどい聲こゑで『タニユーシヤ!』と絶叫ぜつけうした。

胡桃くるみの叢くさむらの蔭かげから下女げぢよの圓まるい顔かほが現あらはれた……アヴデイは全く引ひき別わかけられた。マシヤは下女げぢよの居かるので安心あんしんして動うごかない。併しかし其不そのふ作法さぽう者は激怒げきどして總身そうみを震ふるはして居かた。其眼そのめは半なかば閉とぢて居かる、彼かれは拳こぶしを握にぎつて激情げきじやうして哄笑こうせうした。

『妙めう、妙めう、巧妙かうみい滑稽こつげいだ——誰たれが見みても!』と叫さけんだ。
マシヤは石いしの如ごとく硬かたくなつた。

『貴嬢あなたは悉ことごとく用心ようじんして御居おみでだ、決けつして慎重しんちやうを御捨おすてになりませんか。エ、? 私わたしの見みる所ところでは今時いまどきの令嬢れいぢやう達は老人らうじんよりも遙はるかに先見せんけんがあります。その通とほり貴嬢あなたの精せい一杯いはいの戀こひがこれですか!』

『ラチコフさん誰たれが戀こひのことをいふ權利けんりを貴郎あなたに與あたへました……如何どうな戀こひです?』

『誰たれがと? 貴嬢あなたではありませんか! それから何なにんです!』

とラチコフが遮つた。彼はこれでは全く事を打壊して居るのであるとは知つたが抑へることが出来ない。

『妾は考のないことを致しました。妾は貴郎のデリカトツスを……併し貴郎は佛語を御存知ない……それなら貴郎の禮讓に倚信して貴郎の御求めに應じましたので、妾は……の積りで……。』

アヴデイは眞蒼になつた。マシヤは急所へ突き込んだのである。

『成程私は佛語を知らんかも知れませんが、併し私は知つて居ます……貴嬢が私を苦めて楽しんで御居でたのを知つて居

ます。』

『アヴデイさん少しもそんなことは……眞實に妾は悲う御座います。』

『イヤ萬望、私の爲めに悲むと有仰るな、兎も角も御免下さい。』

とラチコフは斷乎として遮つた。

『ラチコフさん……。』

『そんな大侯爵夫人の様な風をなさるには及びません……忘れるのが難儀ですから私の心にそんな風を刻み付けしないで下さい。』

マシヤは一足退きつて向き返り彼方へ歩行き出した。
 「貴嬢の御友達で羊飼の若者で貴嬢の優しい戀人のキスタ
 ーに御傳言はありませんか？　キスタは仕合な男ではな
 いか……。」

とアヴデイは後から叫號つた。彼は既に前後を失つたの
 である。

マシヤは返事もしないで急いで喜んで逃げた恐怖と激情
 にも關らず彼は心に一道の光明を感じた。丁度苦しい夢
 から覺めたときの様に、又暗い室から大氣と日光のある所
 へ出た時の様に感じた……。アヴデイは狂氣の如く自分の

周囲を見廻した。そして無言で荒々しく稚い木を折つて自
 分の牝馬に飛び乗り其不幸な獸が六哩の處を十五分程で飛
 び通して其夜倒れて了つた程烈しく刺馬輪を當て用捨なく
 手綱を引き緊めた。キスタは夜半迄ラチコフを待ち、老
 けて翌朝彼の家へ廻つた。處が取次が主人は伏せつて居て、
 誰れにも面會しないと云ふ吩咐であると告げた。

「己れにでもか？」

「閣下で御座りましても！」

キスタは二度迄街を上へ行き下へ行きして、過敏な想
 像に苦められて家へ歸つた處が従僕が手紙を差し出した。

『誰れからだ？』
『ペレカトフ家からで、アルチオムカと申す飛脚が持て参りました。』

キスターの手は慄ひ始めた。

『ペレカトフ家からの御挨拶を申上げる様に、又御返事を御待ち申して居る様にとの命令ださうで御座ます。飛脚にフオドカ酒を出しませうか？』

キスターは寛々手紙を開封して讀んだ。

妻の親愛なる善良なるフキオドル、フエヲドリツチ様へ
是非くお目にかゝり度儀御座候間御都合御成候は

ば今日にも御光來被下度御願を御拒み被下間敷様我々の舊交の爲に御哀願申上候若し唯……を御承知に御座候は……乍去御身は何事も御承知に御座候暫時の間左様ならば如何にや。

マリーより

追て明日は必ず御光來被下度候。

『それで閣下、アルチオムカにフオドカを出しませうか？』
キスターは振り向いて混雜した眼付で久しく従僕の顔を凝視めて、それから一言も發はないで其室を出た。

『主人がフオドカをお前に出して私も一緒に飲む様にと有

仰つたよ。』

と従僕はアルチオムカに言つた。

九

マシヤは麗な感謝の情を表はした顔をしてキスターに會ふが爲めに遣つて来て、キスターが客間へ入つた時に極めて熱心に愛情を含めて其手を握つた。爲めにキスターの心臓は喜悅の爲めに動悸を打つて氣が軽くなつた様に覺えた。併しマシヤは一言も云はない、活潑に室を去つた。セルゲー、セルゲーチは長椅子に掛つて牛蒡の花を弄んで居た。話が始つたがセルゲーは平常の様に他の問題から終に

犬のことへ持て來るのが巧く行かなかつた。處へキスターの好きな絹羅紗の肩衣を着けてマシヤが入つて來た。晝飯の時には一同笑つたり戯談を云つたりした。セルゲー、セルゲーチでさへ氣が乗つて鴛鳥の様に妻に頭を隠して彼の青年時代の一番面白い噺をした。

『散歩を致さうではありませんか?』

と晝飯が濟んだ後でマシヤはキスターが喜んで従ふを自信して居ると云ふ風な威嚴のある情の置つた聲でキスターに云つた。

『妾は貴郎に極く々緊要な御話しが御座ます。』

マシヤは手袋を穿めながら迷はず様に嚴肅に云ひ出した。

「母親さん貴女も御一緒に往つしやいますか？」

「いゝえ。」

と母は答へた。

「庭へ行くのではありませんよ。」

「それなら何所へ」

「ロング、ミードオーへ！ あの小森へ！」

「タニユーシヤを連れて御往で。」

「タニユーシヤ！ タニユーシヤ！」

鳥の様に室から飛出しながら音楽的に叫んだ。十五分程過ぎて彼等はロング、ミードオーへ出掛けた。マシヤは自分の大好きな牝牛の傍を通つたときにそれに麵麩を與つて其頭を軽く打ちキスターにも撫でさせた。

マシヤは上機嫌で愉快さうに饒舌る。キスターは待つて居る話を早く聞き度くつて堪らないが喜んで應答して居た。

タニユーシヤは無禮にならない程の距離を取て時々若い御嬢様を敏捷に窃み眼に視て跟いて歩行いた。

「貴郎は妾のことを怒つて在らつしやいますか？」

とマシヤが聞いた。

「貴嬢を？ 何故？ 如何して？」

「一昨日……貴嬢は覚えて在らしつて？」

「其の時は貴嬢は御機嫌が御悪かつたので……それ丈のことです。」

「何だつて一本に成つて歩行くので。腕をお貸なさい。夫で宜う御座います……貴郎も其時は御機嫌が悪かつたので。」

「さうです私も。」

「併し今日は機嫌が好う御座います、ねえ？」

「左様見えます……。」

「如何してだか御存知ですか？……からで。」

と云ふでマシヤは重々しく點頭いた。そして、

「それで、何故と云ふに……貴郎と御一緒ですから。」

とキスターの方を見ないで言ひ加へた。

キスターは握手をした。

「併し何故私に御聞きなさら無いので？」

とマシヤは低く囁いた。

「何をです？」

「御虚言爲さいますな……私の差出した手紙のことで御座

います。

『私は貴嬢の方から有仰るのを待つて居るので……。』

マシヤは感情的に遮つた。

『妾が貴郎と御一緒に居ると幸福なのは無理もありませ
ん、貴郎は柔和で御心立が善く在らしやつて禮讓を亂すこ
と（此處を佛語で言つた）の出來ない御方だと申上げて宜
しいのですもの、貴郎は佛語を御存知で。』

キスターは佛語を知つては居るが少くもマシヤの云つた
事は解らなかつた。

『其花を取つて下さい、それを……何んと云ふ美しい花だ

らう！』

マシヤは花を賞めて居たが急にキスターに預けた手を引
き抜いて氣遣はしい笑を含んで、キスターの上衣の扣鈕の
穴へ花の軸を挿し始めた。其繊軟な指が殆んどキスターの
唇へ觸れさうだ。キスターは其指を見てそれから顔を眺
めた。マシヤは『貴郎、御顔を下げて妾の手袋の先端に接
吻をなすつても宜う御座います』と云つた様に點頭いた。
其内に狎熟の小森に近くなつた。マシヤは益々考へ込んで
遂に兩人とも黙つて了つた。彼は曩にラチコフがマシヤを
待ち受けた處へ來た。蹈躑つた草はまだ眞直に元へ復らな

い。折つた稗樹はまだ萎まないが其細小い葉は丁度少し巻出して色が褪めかゝつて居る。マシヤは傍を見廻して直ぐキスターに向つた。

「何故此所へ御連れ申したか御解りですか？」

「イヤ存じません。」

「貴郎は御存知ありませんの？ 何故今日は御友達のラチ

コフ様のことを有仰いませぬ。」

「貴郎は平常も大層賞め……。」

キスターは下を瞰て黙つて居た。マシヤはやつと言ひ出した。

「貴郎は御承知ですか、妾は……昨日……彼の方に會ふ……約束を……致しました。」

「存じて居ります。」

とキスターは急込んで言つた。

「御存知ですと？……夫れで解りました一昨日ラチコフ様が勝利を得たのを御自慢なさる風で大層急はしかつた理由が。」

キスターは云ひ出さうとした……。

「マア黙つて御居でなさい、妾の申すことに反抗なさらずに……妾は彼方が貴郎の御友達なのを存じて居ります。です

から妾が彼様馬鹿なことを爲るのを止めて下さらなかつたので御座いますか？ 何故貴郎は小供と思つて耳打をして被下なかつたので御座います？ 貴郎は……それとも妾を思つては被下ないので？……。』

『そんな権利はありません……。』

『何様な権利と！ 友達ともだちの権利けんりです。併し彼の方も貴郎の御友達で……妾は貴郎の爲めに耻ぢます……彼方が御友達で……彼の人は昨日妾に丁度……の様な舉動を妾になさいました……。』

マシヤは彼方を向き、キスターの眼は輝つて、顔は眞蒼

になつた。

『オ、御心配なさいますな、御怒りなさいますな、御怒りなさいますな。何んでもありません。喜んで昨日の御説明……有體に御話しを致します。』

とマシヤが付け足した。

『貴郎は妾が何様の御嘶をすると御思ひで御座います？』

ラチコフの讒訴とでも？』

『そんな詰らん！ 妾は彼の方は忘れて了ひました……妾は打明けて貴郎の御宥しを……御助言……を得たいので御座います。貴郎は平常も打解て下さいますので貴郎と御一緒

に居ると気が楽で御座います……貴郎はラチコフさんと違ひます。』

キスターはやつと切り出した。

『彼の男は魯鈍で、野卑な奴です、しかし……。』

『何んで併しです？ 併しと有仰るのは御耻では御座いま

せんか？ 彼の方は野卑で魯鈍で悪心で傲慢です……御解

りでせう、併しでは御座いません。』

『貴君は怒つて御話をなさる。』

と悲しげにキスターが云つた。

『怒つて？ 奇妙な怒り方で！ 私を御覽なさい人が怒つ

たときに此様ですか？』

マシヤは尙ほ續けた。

『御聞きなさい妾を如何御思考なすつても構ひません……

併し不平の爲に貴方と散歩に出たと御思なら宜う御座いま

す……宜う御座います……（眼に涙を出して居た）妾は本

気で怒りますよ。』

『私には淡泊に有仰い。』

『馬鹿な御方！ 何といふ御理解の悪い！ そら妾を御覽

なさい。妾は打解けて居りませんか？ 正直に見えませ

ん？』

『全く左様に思はれます。』
 キスターはマシヤが不安の主張を以て自分の眼付を讀ま
 んとして居るを見て斯く云ふた。
 『併し何がラチコフと出會ふ約束を爲る様に貴嬢を誘惑し
 たか御聞かせなさい。』

『何が誘惑ですと？ 全く妾に分りません。彼の方は二人
 切りで談話を爲たいと云ふことで妾は彼の方に、時が則ち
 自由に談る機會が無かつたからのと考へました。儲それ
 で彼の方は自由に談りました。御承知の通り彼の方は大層
 な人ですが併し癡漢で御座います全く……二語を組合せる

のも知らないので畢竟無學なので御座います。妾は苛く非
 難すのでは御座いせんが……彼の方は妾を輕卒な氣の狂
 つた下らない娘と思ひましたらう。妾は前に少しも……な
 ど、申したことは御座いせんので……彼の方は屹度好奇
 な心を起したのですが妾は貴郎の御友達たる價值のある方
 ですからよもや……と思ひましたので……。』

『萬望私の友達と有仰つて下さるな。』

とキスターが口を挿んだ。

『いゝえ、妾は貴郎とラチコフを引き裂かうとは致しませ
 ん。』

『噫神よ、貴嬢の爲めなら一人ならず友達を何時でも捨てます。私とラチコフ君との間には最早萬事去りました。』
とキスターは急ぎ込んで付け足した。

マシヤは熟と其顔を視た。

『宜しう御座います最早澤山です、彼の方のとは申すまい。これが妾には後の爲めに學問になります、妾は悪く申されても致方が御座いません、是迄數月の間毎日の様に善良な才幹のある聰明で親切で……（マシヤは混雑して吃つた）少しは……彼方でも妾を氣に止めて……御居での様子に見えた方に御面會に掛つて居ながら阿呆の様に（調子が

早くなつた）……ラチコフさんの方を擇んで……イヤ、イ

ヤ擇びはしません、がしかし……。』

マシヤは首を俛れて混雑して話を止めた。

キスターは驚怖の體であつた。『そんなことはあるまい』と自ら口の中で繰返して居つたが遂々口を切つた。

『マルヤ、セルギーヴナさん。』

マシヤは頭を擡げて涙に濡んだ重い眼をキスターに向け
た。

『貴郎は妾が申して居る方を御察しにはなりませんか？』
とマシヤが聞いた。

キスターは漸と呼吸を吐きながら其手を差し出した、マシヤは直ぐに熱心にそれを握つた。

「貴郎は是迄通り妾の御友達です、さうでは御座いませんか？……何故御返事を爲さしません。」

「私は貴嬢の御友達です、御承知の通り。」
とキスターは囁いた。

「それで貴郎は妾に辛らくは爲さませんか？ 妾を宥して下さいますか？……妾の申すことが御解りですか？ 貴郎は唯つた昨日或る人と約束をして今日また直に妾が貴郎に御話しを申して居ります様に……他の方と御話を爲て居

る娘があつたら御嗤ひにはなりませんか？……貴郎は妾を

御嗤ひにはなりませんか、如何で？……。」

マシヤの顔は眞赤に輝いた、そしてキスターの手を両手で緊め付けた。そこでキスターは答へて、

「貴嬢を笑ふ位なら私は……私は……何故貴嬢を愛しませう……私は貴嬢を愛して居ります。」

と叫んだ。

マシヤは顔を隠した。

「マルヤ、セルギーヴナさん眞實に貴嬢は私が貴嬢を愛して居るのを前から御存知でしたか。」

十

此會合より數週間過ぎてからキスターは其母に宛て、次の手紙を認めながら唯一人で己が室に腰を据ゑて居た。最も親愛な母上に！——兒は御身と兒の最大なる幸福を願つに急に御座候、兒は結婚を爲さんと致居候、兒は是迄兒の感情欽喜悲哀を御身と願ち來り候ひしに生涯に變化を及ぼし候此重大なる事件を前々の書面には御暗示も不申上候故此の御報知に接し定めて御喫驚の外無之事と奉存候、此沈黙の理由は中々難申盡御座候概略を申上ぐれば兒は近頃迄慕はれ居り候を氣付き不申尙自分に

致しても兒に強き情の有之候を自ら確め候は遂近頃のこと、これありませう。此所より最初の頃に差上候書面の内にペレカトフなる隣人の事を申上候兒の申上ぐる處は即ち其獨娘マシヤのことに御座候兒は全く兩人の幸福なる可きを確認仕候兒の彼に對する情は決して過去のものには無之友情と愛との相混じ候深厚誠實のものに御座候。彼の晴々しき柔和なる性質は兒の嗜好と全く相和し申候彼は善き教育を受け聰明に有之其上立派にビヤノ其他を弾じ申候、若し唯當人を御覽に相成候は！兒の自ら寫生仕候肖像を封入仕候彼が肖像畫より數

百倍美しきは全く申上るに及び不申候マシヤは最早御身を愛し候て熱心に御目に掛り度存居候兒は退職致して田舎に落付き農業に従事可致と存居候ペレカトフ氏は好良なる條件の下に四百サーフの財産を所有致居り物質的の點より見るも兒の決心を御賛成不相成を得ざること、存候兒は當地を出發致しモスコーに參り御目に掛り可申候二週間より後れ不申御待ち被下度候兒の最も親愛なる母上様兒は何たる幸福に候ぞや？…御接吻被下度…草々キスターは手紙を巻いて封を爲し立つて窓へ行つて暫く考へ込んで又机へ戻つた。それから料紙の小さいのを取り

出して注意して墨に筆を浸したが餘程の間書き始めないで眉毛を寄せて、天井へ眼を付けて筆の尖端を噛みて…居た。遂に決心して十五分程費つて次の如く書いた。

親愛なるアヴデイ、イヴァノリツチ君へ——兄の最後の御訪問以來（三週間に相成候）何等の御音信も無之生に一言も言葉を掛けられず生に遇ふを避け居らるゝ様見受け申候、勿論我が好むまゝに舉動ふは各自の自由に御座候へ共兄は好んで我々と交りを断たれ候而して茲に書面を差上げ候として決して君を非難致すの意には無之候何事なりとも我身を人に強ゆる意思も慣習も無之只其事

に就て我に非難する處なきを感ずれば、足り申候、茲に
 書面を差上げ候は義務ありと感ずる處有之候が爲に御座
 候、生はマルヤセルギーヴナ、ペレカトフに婚儀を申込
 み彼及び兩親の承諾を得申候生は或る誤解と疑惑を避け
 んが爲に有體に早速此事實を御報知申上候生は他人の意
 見及び感情に一向係らざる人の意見を承るは甚だ肝要な
 る事とは存じ不申生は是迄内密に此事を進行し又進行し
 つゝありと思はるを懸念不致候故單に事實のみを申上候
 兄は生を能く御承知相成候とに有之此度の所爲は全く他
 の劣情より出で候ものに無之候事を斷言仕候兄に書面

を差上候は是が最後に御座候故我々の舊交の爲めに此世
 に於ける有ゆる幸福を兄に望むを禁ずるを得不申候――
 生は依然として尙ほ衷心より兄の從順なる從僕に御座候
 フキオドルは此書面を使にて出し制服を着代へ馬車の用
 意を命じた。
 氣が軽く幸福に感じて彼は其狭い室を囁きながら徒行き
 廻つて二度迄飛び上り歌の本を圓く捲いて之れを青い紐で
 縛つて居た……戸が開いてラチコフが肩章の付かない上衣
 を着けて帽を被つたまゝで入つて來た。キスターは駭いて
 縛つて居たものを了らず、室の中央にまだ立つて居た。

『それで君はペレカトフ嬢と結婚するの？』
ラチコフは静かな聲で質問した。

キスターは激し始めた。

『君禮儀を知つて居る人は他人の室へ入つた時には帽子を脱つて御早うと云ふぞ。』

其亂暴人は急に引き下つて帽子を脱いだ。

『勘辨し給へ御早う。』

『御早う君は僕がペレカトフ嬢と結婚すると聞くのか？それなら君は手紙を讀まなかつたのか？』

『讀んだ、君は結婚するのだ御祝ひ申上げる。』

『難有く受ける且つそれを感謝する。』

『併し僕は驚かざるを得ない。僕は少し君に説明を求め度い。』

心善しの人は答へた。

『何なりとも喜んで、實はそれを待つて居たのだ。君の僕に對する仕向は餘程妙だつた。僕の方では僕が少くとも……の價値がないこと、考へた。僕は……を望む理由を有たなかつた。併しまア坐らないか、煙草は如何だ。』

ラチコフは坐つた彼の舉動に大儀相な所があつた。彼は上髯を撫で、眉を吊り上げた。そして遂に始めた。

「偕て君は何故そんなに長く僕に隠して居つたのだ？」
 「君の云ふのは何んのことか？」

「何故君は左程潔白の人の様に容態振るのか？ 君も亦我罪業者と全く同じでありながら。」

「僕は了解に苦しむ……何か僕は君の感情を害したか？」

「了解が出来ない……と宜しい、もつと明白に云て見やう
 茲に例へば君が始終ペレカトフ嬢を好いて居つたのか、それとも突然の情より起つた事なのか、マアそれから打明けて聞かせ給へ。」

「僕は寧ろマルヤ、セルギーヅナと僕との關係を君と論じ

ないが宜いと思ふ。」

とキスターは冷淡に答へた。

「オ、全く、夫れは君の御隨意だ、併し若し只僕をして君が是迄僕を欺罔して居つたのを信ずるを許すの仁恵あらしめ給へ。」

アヴデイは極めて熟思して語氣強く語つた。

「君は左様は信じ得ない、君は僕を知つて居る。」

「僕が君を知るとい……誰れが君を知るのだ？……他人の心は暗い森と同じことだ。且つ人の善い方向は無闇に極端の處まで持ち揚げるものだ。僕は君が多大の情を以て眼に

涙を湛へて獨逸の詩を讀むを知つて居る、壁に澤山地圖を懸けて置くのを知て居る、君が身體を清潔にし居るのを知て居る又……をも知て居る……併し其以外に僕は何も知る所はない……。」

キスターは遂に調和を失つた。

「一體君の來訪の目的は何であるか聞かせ給へ。君は三週間以來僕に音信も爲ないで今日來たのは明かに僕を愚弄する氣で來たのだ、僕は小兒ではないよ、誰れでも用捨はせん……。」

ラチコフは遮つた。

「勘辨し給へ、勘辨し給へ。誰が敢て君を愚弄しやうとするものか、全く其様な事ではないのだ。僕は極めて恭謙な御願即ち僕に對する君の仕向けを説明するの仁惠を僕に垂れ給へ。ペレカトフの家族と知己になるのを僕に強ひたのは君では無かつた？ 君は君の卑賤なる從僕に其心が花咲くを保證は爲なかつたか？……さうして遂に貞操なるマルヤ、セルギーヴナを僕に押付けは爲なかつたか？ 君は多分宜い様に話されて知つて居るだらうが彼の最後の嬉しい光景に付ては全く君の負ふ處であるを推斷し得ないか？ 許嫁した娘は勿論何事も殊に自分の罪のない無分別を許嫁に

話すもの、如何して僕が此様な馬鹿者にされて居つたのは
 全く君に感謝すべき處であると想像するを禁じ得るか？
 君は君の所謂僕の開蓄に依て如此多大の感興を得た！』
 キスターは室を彼方此方歩行いた。そして遂に謂ふた。
 『此方を見よラチコフ、僕は信せんが若果して君が眞實(半
 分戯弄けて)君の云ふ如く思つて居るのならば僕の行爲と
 意思とに如此き侮辱的の解釋を下すのは君の爲めに耻づべ
 く且つ邪惡の所業であると云はざるを得ない。僕は自ら辯
 明しやうとは爲ない……僕は君の良心と君の記憶とに訴へ
 る。』

『その通り僕は君が始終マルヤ、セルギーヴナのことを囁
 いて居たのを記憶して居る、此外に一つ聞き度い事がある、
 君は何時ぞや、僕と談話をした後で則ち君を此上ない立派
 な友達と思つて彼の娘と約束した會合を痴漢の如く君に御
 饒舌した後で君はペレカトフの家へ行きはしなかつた
 か？』

『何！ 君は僕を疑ふ……。』

刻むが如き冷酷を以てラチコフが遮つて。

『僕は自分で疑はない事に付ては他人も疑はない併し僕に
 は他人は決して僕よりも善良ではないと想像する弱點があ

るのだ。』

『君は間違つて居る他人は君よりも善良であるのだ。』
とキスターは烈しく遣り返した。

ラチコフは氣にも止めずに俯いた。

『それなら僕は其人達に祝辭を呈する併し……。』
激怒して今度はキスターの方で破裂した。

『併し記憶せよ君は如何んな條件で君は……と……會合を
約束したのか? ……併しそれを話した處で何んにもならな
い。僕は……君の勝手に考へ給へ……で君の一番良いと思
つた通りに爲給へ。』

『善し、夫れが一番良い、遂々君は本音を吐き出した。』
『君の一番良いと思つた通り爲給へ。』
とキスターは繰返した。

アヴデーは同情を装うて進めた。

『フキオドルよ僕は君の地位を了解して居る、確に快く
ないには相違ない。或る人が働いて居た、即ち或事件の一
部を遣つて居つて誰れも詐欺師とは思はなかつた。然るに
凡ての不意の……から……。』

キスターは齒を噛み合せながら遮つた。

『若し僕に失戀が君にそんな事を言はせるのだと信ずるこ

とが出来たらば僕は君の爲めに誠に御氣の毒に思ふ。僕は君を許しもする……併し君の侮辱と虚偽の詰責とに依れば僕には如何しても苦しい驕慢の絶叫としか受取れない……随て僕にも同情を寄せ得ない……君は君の受け取れた處を當然に値して居るのだ。』

『ウ、我に憐れを垂れよ、何を此奴が何を云ふ。』
とアヴデーが呟いた。

『驕慢と或は左様かも知らん。左様だ左様だ、僕の驕慢は激げしく且堪へ難い程苦められたのだ。なれども誰れが驕慢でない人があるか？ 君は驕慢でないのか？ 全く僕は』

驕慢だ、それで人が僕の爲めに悲しく感ずるのを許さな
い……。』

キスターは傲然として酬いた。

『それを許さない！ 君何んたる言ひ様ぞ！ 我々兩人の情交は君自ら壊つたのを忘れ給ふな。僕は局外者として僕に對する様に君に願はなければならぬ。』

『壊れた！ 我々の情交は壊れた！』
と繰返したアヴデーは尙續けた。

『僕を了解し給へ、僕は音信を爲なかつた。且君の爲めに悲む處があつた爲めに君に會はなかつたのだ。君は君が僕』

の爲めに悲んで呉れる故に僕も君の爲に悲むのを許して呉れなければならぬ。……僕は君の良心を痛める爲めに君を悪い地位に置かうとは思はない。君は我々の情交といふことを云ふ……君の結婚の前と同じ様に友人で居られるとでも思つて居る様に……馬鹿な！一體君は前には只君の想像した優超を僕に見せ付ける爲めに僕と友人であつたのだ。』

アヅデーの此反覆はキスターを壓服し混亂した。

『此不愉快の談話は止して呉れ給へ。如何して君は僕に面會に來たくなつたのか全く解らない。』

『君には僕が何の爲めに來たのか知れないか？』

アヅデーは斯う尋ねる様に聞いた。

『僕には慥かには分らない。』

『わから——ないか？』

『否や、言はう……。』

『驚いた？……これは驚いた！ 誰れでも君の才智に及ば

うと思ふ人はあるまい！』

『サア明白り言へ……。』

静に立上りながらアヅデーが云つた。

『僕は決闘を挑む爲めに來たのだ。今度は解つたか、僕は

君と闘ひ度いのだ。噫、君は彼の時の様に僕から免かれ得ると思ふだらう。併し君は君の向ふ相手は何様な人だか知らないのか？ 恰も彼の時宥した……。」

キスターは冷然として急に遮つた。

「極めて善し、僕は君の挑みに應ずる。萬望君の介副人を遣し給へ。」

アヴデイは恰も猫が獲物の早く行くのに我慢出来ない時の様に追窮した。

「善し、善し、僕は明日君の美しい理想的の顔へ弾を打込むことになつたのを非常に愉快に感ずる。」

キスターは賤んで答へた。

「君は決闘を濫用し度がる様に見える。君の思ふ通りに爲給へ、僕は只君の爲めに耻づる。」

「慥に禮義だつた（佛語）！……いやマルヤ、セルギーヴナではないが僕は佛語を知らない。フキオドル君復た御目に掛るまでの間左様なら」

ラチコフは斯う唸つて帽子を被り腰を屈めて外へ出た。

キスターは數回室内を彼方此方大股に歩行いた。顔は火の様になつて、胸は激しく躍つた。彼は恐も怒も感ぜない。只此様な男を眞實一度は友人として仰めたことを考へて心

を痛めたのだ。ラチコフとの決闘の考は却て殆んど愉快であつた……最早過去のことより脱して、其道に横はれる岩を飛び越えて、偕て其後遂に順潮に浮ぶのである……。

『善し我は我幸福を得んが爲めに戦はん』と考へた。マシヤの幻影は彼に微笑んで且彼の成功を約する如く見えた。彼は『我は殺される爲めに行くのではない！ 何んの殺されるものか！』と平静なる笑を湛へて繰返した。机の上には母に送る手紙が上せてある……が彼は心の一時に苦痛を感じた。何の道其發送を延ばさうと決心した。キスターに於ても亦危険に臨んだ者の熟知せる彼の活力が急速になり

つゝあつた。彼は決闘の有らゆる結果を熟考して、心の内でマシヤと自分を不幸と別離の有らゆる苦惱の内に陥れて夫から希望を以て未來を眺むるのを描いて見た。彼はラチコフを殺すまいと自ら誓つた……彼は如何してもマシヤの方に引付けられる。彼はちよつと休んで、それから忙しく萬事を處分して、晝餐後直にペレカトフに向つて出發した。今夕中キスターは上機嫌であつた。恐くは機嫌過ぎるほど。

マシヤは大分ピアノを弾き、凶事の前兆を感じもしないで愉快にキスターと散歩した。始はキスターはマシヤが何

んにも知らないので心を痛めたが後にはそれを以て幸福な前兆と取つて喜ばされて且つ保證された。マシヤは日増に益々キスターを好いて來た。でマシヤには情よりも幸福の方が甚だ肝要なるものであつたのである。加　之　ア　ヴ　ゲ　イ　の　こ　と　か　ら　し　て　過　大　の　望　よ　り　外　れ、喜んで永久それを委棄した。子ニラ、マカリ、ヴナはキスターを我子の如く可愛がつた。セルゲイ、セルゲイチは例の如く妻の嚮導に従つた。『お目に掛るときまで左様なら。』

キスターが靜かに優しくマシヤの手に接吻したときにマシヤは客間迄跟いて來て柔和な笑を湛へて斯うキスターに

云つた。

キスターは自信して繰返した。

『御目に掛るときまで左様なら。御目に掛るときまで左様なら。』

然しペレカトフの家から半哩程往つたときにキスターは馬車の内に立て、漠然たる不安を抱いて燈の見ゆる窓を視始めた……家の内は塔の如く眞暗であつた。

十一

翌日午前十一時に戦場の敷を履んだ老少佐なるキスターの介副人が遣つて來て、獨りで唸つて上髯を噛みながら凡

てのことアジデイに拙い様にと願つた……馬車が扉の處へ
 来た。キスターは少佐に一通は母に、一通はマシヤに宛て
 た手紙を渡した。

『誰に宛てたのだ？』

『サア、一通の方は決して話せない……。』

『馬鹿な、こんなことは、鷓鴣を打つ様に遣つて了ふさ……
 ……。』

『何方にしても宜いから……。』

少佐は困つて上衣の隠袋に二通の手紙を挿した。
 『出掛けやう。』

兩人は出掛けた。キリロヴオ村から一哩半の小さい森の
 内でラチコフが其舊友なる香水副官と兩人で彼等の來るの
 を待て居た。誠に楽しい天氣の日で、鳥は平和に囀つて居
 た。森の近所には一人の農夫が地を耕して居た。介副等は
 距離を測量し、埒を定め短銃を検査して彈を込める間、對
 手は互に一方を見向きもしない……キスターは己のが集め
 た花を振りながら氣にも止めず彼方此方を歩行いて居た。
 アジデイは腕を拱いて眉を皺めて熟靜として立て居た。勝
 負の時間が来た。『始めよ！紳士！』キスターが急いで埒の
 方へ向かつてまだ五歩と歩行まない内にアジデイが發砲し

た。キスターは跳び上つた。尙一步進めた。蹠躑いた。キスターの首が垂れた……膝が折れた……草の上へ袋の如く倒れた。少佐は傍へ駈寄つた……『それではよいか？』死に垂々した人が私語いた。アヴデーは己が殺した人の所へ行つた。其鬱幽な沈んだ顔は兇暴な激怒した後悔を現はして居る。彼は副官と少佐を視て罪人の如く頭を屈めて一言も發はずに馬に乗り静かに大佐の陣營へ真直ぐに歩行せた。

マシヤは……今日迄存命で居る。

(完)

なぎの終

不許複製

明治四十一年十一月五日印刷
明治四十一年十一月十八日發行

著者 故國木田獨歩
 發行者 東京市神田區表神保町三番地 高木利八
 印刷者 東京市小石川區久堅町百〇八番地 山田英二

定價卅五錢

發行所 東京市神田區表神保町三番地 振替口座四一〇五番 彩雲閣

博文館印刷所印刷

國木田獨步著

獨步集

定價金四十錢
郵税金六錢

【册一全】

獨步集第二

定價金八十錢
郵税金六錢

【册一全】

濤

定價金八十錢
郵税金八錢

【册一全】

聲

武藏野

定價金三十四錢
郵税金四錢

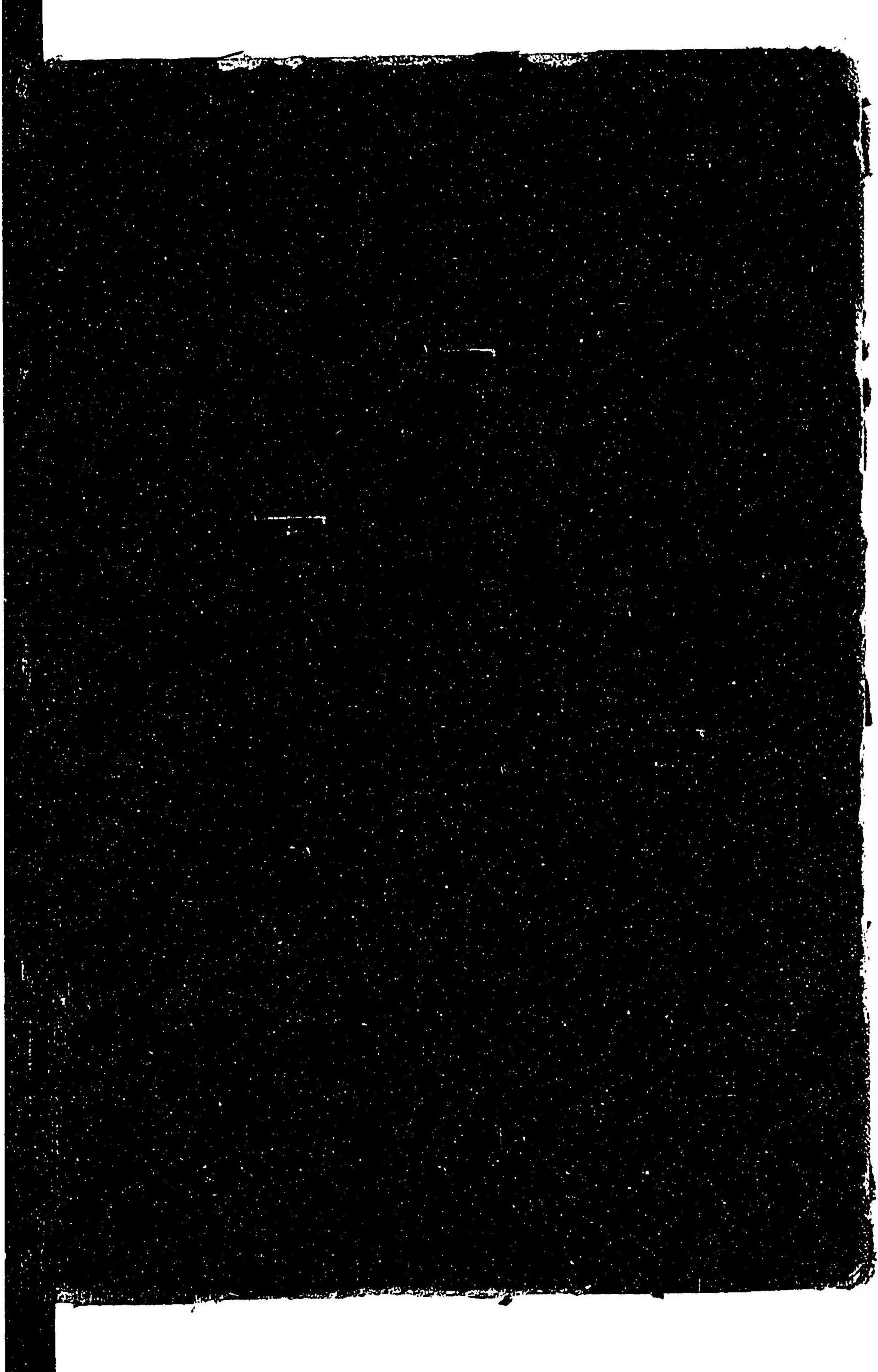
【册一全】

彩雲閣

東京表
田保神

振替口
座五〇一

94
598



94
598

094750-000-5

94-598

渚

国木田 独步/著

M41

DBQ-2321

